

翻刻『日本マルクス主義文献』 Web版の公開によせて

——附論 聯盟版『マルクス・エンゲルス全集』について

久保 誠二郎

はじめに

- 1 他の社会主義文献目録との比較
- 2 『日本マルクス主義文献』の採録対象
- 3 90年前のマルクス・ブームと『日本マルクス主義文献』

附論 聯盟版『マルクス・エンゲルス全集』について

はじめに

今回、翻刻して公開する『日本マルクス主義文献』は、1919年から1927年までに日本で刊行されたマルクス主義文献のタイトル、執筆者、掲載誌、刊行年等の書誌情報を採録した文献目録である。採録された文献のタイトルは700点以上にのぼる。作成は1929年であり、当時の大原社研・図書室主任、内藤赳夫を中心として編集された。この資料は大原社研にも複製や確実な記録が残されておらず、本特集でも執筆している大村泉教授がモスクワで発見して2002年に初めて紹介⁽¹⁾するまでその存在が知られていなかった資料である。この資料がたどった経緯については、すでに大村教授によって論じられている⁽²⁾のでここでは割愛するが、簡単に紹介すれば次のようである。

1920年代、当時の大原社研所長、高野岩三郎とソ連のマルクス/エンゲルス研究所長、D.リャザーノフとの間で、日本におけるマルクス研究を文献目録として取りまとめ、当時のマルクス研究の国際誌であった“Marx-Engels Archiv”（マルクス/エンゲルス研究所）に掲載することが合意された。すでにロシア語版（1925年）次いでドイツ語版第1巻“Marx-Engels Archiv”（1926年）にはドイツ語文献を中心としたマルクス主義文献目録が掲載されており、大原社研が取り組んだものはこれに範をとった文献目録であった。高野の指示で作成を担ったのは大原社研の図書室主任であり、また書誌学者というべき内藤赳夫であった。この『日本マルクス主義文献』は1929年に完成をみてモスクワに送られた。しかし、その後のソ連でのスターリンの台頭によるリャザーノフの失脚によ

(1) 大村泉「高野岩三郎と『日本マルクス主義文献』」（『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第39号、2002年）。同号には本目録の複写が掲載されている。

(2) 前掲大村論文

り、この企画自体が実現せず、大原社研から送付された『日本マルクス主義文献』はモスクワのマルクス/エンゲルス研究所のアルヒーフに死蔵されたままとなった。それ以降、この文献目録の存在自体が70年余にわたって忘却された。

今回、翻刻・Web版として公開する『日本マルクス主義文献』はこうした経緯をもつ歴史資料である。この目録の複写そのものはすでに公開されている（注1参照）が、そもそもこの目録はドイツ語誌への掲載を目的としたために全文がドイツ語に翻訳（ローマ字併記も含む）されており、目録に採録された文献（当然ながら日本語文献である）を特定することに困難があった。そこで翻刻・Web版では、採録された文献を特定して、タイトル等の書誌情報をドイツ語から元の日本語表記へと改めることにした。その際、ひとつひとつ現物（複写を含む）を実見して書誌情報を確認し、誤りには訂正を加えた。また、オリジナルの『日本マルクス主義文献』には文献の副題は採録されていないが、この翻刻・Web版では副題のある文献についてはこれを採録することにした。

この翻刻・Web版によって、今後は『日本マルクス主義文献』の採録文献の把握が容易になり、マルクス主義普及史研究に活用することができるだろう。以下では、この『日本マルクス主義文献』の概要と普及史上の位置について簡単に述べ、この翻刻・Web版の紹介としたい。

1 他の社会主義文献目録との比較

すでに筆者はこの点を論じたことがある⁽³⁾ので、ここでは要点のみを記しておきたい。

『日本マルクス主義文献』が作成されたのは1929年であるが、この当時、日本ではいくつかの社会主義（マルクス主義）文献目録が作成されている。著名なものとしては、内藤赳夫が森戸辰男の指導のもとで編集に従事した『日本社会主義文献 第一輯』（大原社研）が同じく1929年に刊行されており、また細川嘉六『日本社会主義文献解説』（『日本資本主義発達史講座』）が1932年に刊行されている。ちなみにこの細川の文献目録も内藤が協力している⁽⁴⁾。他にも1926年に刊行された『社会問題講座1-12』（新潮社）にある「社会問題文献解題」などが挙げられる⁽⁵⁾。

これらの文献目録との比較で明らかになったことは、管見の限り、『日本マルクス主義文献』は当時作成された日本のマルクス主義文献の目録としては最大の採録点数（757点⁽⁶⁾）をもっていることである。また採録期間が1919年から1927年までであり、1920年代という日本におけるマルクス

(3) 久保誠二郎「大原社会問題研究所『日本マルクス主義文献』（未刊行）の意義」（大原社会問題研究所雑誌、559号、2005年）

(4) 戦後刊行された細川嘉六監修『日本社会主義文献解説』（大月書店、1958年）によせた細川の序を参照。

(5) 筆者が比較対象とした文献目録はこれらの他に『マルクスとエンゲルス』（嘉治隆一、後藤尋夫編、1925年）にある目録、『最近十年間における思想関係出版物総覧』（刀江書院、1933年）、『邦訳マルクス・エンゲルス文献』（内藤赳夫著、1929年）、『邦文 マルクス・エンゲルス著作集目録』（大原社研、1928年）である。拙稿参照。

(6) この採録点数は、オリジナルの目録で下線を引いて記載されている点数であり、また目録の巻末にある雑誌名を含む。下線が不明なもの、また実見による確定が終わっていないものもあるため、最終的に採録点数は変動する可能性がある。

主義の普及史上のひとつの画期，すなわちマルクス主義文献の隆盛の開始期から採録している点にも特色がある。加えて14項目に分類されていることも特色の一つである。

文献目録において，その採録点数の多さ，すなわち可能な限り当時の文献を採録することが重要であることはいうまでもないだろう。この点で『日本マルクス主義文献』は採録点数の多さで突出しており，刊行されていれば当時の日本のマルクス主義文献目録を代表するひとつとなったであろうし，また内藤の代表的業績となった文献目録であると思われる。

2 『日本マルクス主義文献』の採録対象

『日本マルクス主義文献』が採録するのは単行本やパンフレット，雑誌論文である。採録文献をここですべて紹介するわけにはいかないので，その概要を示すために，採録対象となった雑誌や新聞，叢書や講座・大系，またパンフレットについて記しておきたい⁽⁷⁾。

『日本マルクス主義文献』は，次の雑誌や新聞から採られている（表1）⁽⁸⁾。

表1

クラルテ	国本	商業経済論叢	東方時論
ダイヤモンド	国民経済雑誌	新社会	同志社論叢
ナロオド	財政経済時報	新社会評論	批評
マルキシズムの旗のもとに	三田学会雑誌	新人	表現
マルクス主義	三田評論	進め	仏蘭西時報
我等	思想	赤旗	文化運動
解放	時事新報	先駆	文化の基礎
改造	自由論攷	早稲田政治経済学雑誌	文化生活
階級戦	社会科学	太陽	文芸戦線
丘人	社会科学研究	大原社会問題研究所雑誌	平民新聞
企業と社会	社会学雑誌	大衆	法律及び政治
共産主義研究	社会思想	中央公論	法律新聞
経済学研究	社会主義研究	丁西倫理会倫理講演集	法律新報
経済学論集	社会政策時報	朝鮮及満州	北京週報
経済及商業	社会問題研究	潮流	満蒙
経済研究	宗教と思想	帝国大学新聞	満蒙乃文化
経済論叢	商学研究	帝国農会報	無産階級
建設者	商学討究	労働運動	雄弁
国家学会雑誌	商学論叢	東亜の光	六合雑誌
国家社会主義	商業及経済研究	東京朝日新聞	

(7) 以下に紹介するものは二次情報（NACSIS Webcatなどの文献データベース）によって確認したもの，実見による確認ができていないものが含まれており，確定ではないことをお断りしたい。

(8) 記した雑誌タイトルの他にも調査中のものがある。また，ここでは誌名変更は考慮していない。

これらの雑誌や新聞のなかには、文献1点のみの採録もある。また、もっとも多くの文献タイトルが採られた雑誌は『我等』であり、80点以上にのぼる。

採録された文献のなかで「叢書」とあるものは次のようである。

アルス社会科学叢書（アルス）	マルクス思想叢書（新潮社）
マルキシズム叢書（弘文堂）	労働問題叢書（大阪労働問題研究所）
マルクス・エンゲルス政治論叢書（希望閣）	レッド・カヴァア叢書（大鏡閣）
社会思想叢書（弘文堂）	社会問題叢書（同人社）
社会思想叢書（同人社）	我等叢書（同人社）
社会科学研究叢書（国際思潮研究会）	社会問題批判叢書（聚英閣）
第四級民叢書（三田書房）	新人会叢書（聚英閣）
社会科学叢書（三徳社）	最新学芸叢書（学芸書院）
社会・経済思想叢書（実業之日本社）	表現叢書（二松堂書店）

採録されたパンフレットには次のものがある。

社会批判パンフレット（社会批判社）	改造研究会発行パンフレット（改造研究会）
大原社会問題研究所パンフレット（同人社）	社会思想パンフレット（同人社）
土曜会パンフレット（新潮社）	無産社パンフレット（無産社）

採録された『大系』、『体系』、『講座』には以下のものがある。

社会科学大系（而立社）	社会経済体系（日本評論社）
社会哲学新学説大系（新潮社）	社会問題講座（新潮社）
経済学説体系（而立社）	マルクス主義講座（上野書店）

目録には、ここに掲げた他に多くの単行本タイトルが採録されている。

3 90年前のマルクス・ブームと『日本マルクス主義文献』

『日本マルクス主義文献』が採録を開始する1919年は、日本の社会主義文献史における画期とされる⁽⁹⁾。多くのマルクス主義文献が掲載された『我等』、『改造』といった総合雑誌、河上肇の『社会問題研究』、堺利彦と山川均の『社会主義研究』、福田徳三らの『解放』、高島素之の『国家社会主義』など、重要な雑誌がこの1919年に創刊されているからである。また、日本の社会科学系の研究所でもっとも長い歴史を持ち、戦前のマルクス研究の拠点であった大原社研の創立も1919年である。

周知のように、「大逆事件」に象徴される権力の弾圧によって沈黙させられた社会主義運動は、その後いわゆる「冬の時代」を迎える。しかし、第一次世界大戦、1917年ロシア革命、1918年米騒

(9) 梅田俊英『社会運動と出版文化』（御茶の水書房、1998年）の「序論」を参照。

動、また労働運動の高揚を経て、社会主義（無産者）運動も復活していく。1919年とは「冬の時代」を経て新たに始まる社会主義運動、したがってまた社会主義文献の隆盛の開始期である。この時期から採録を始める『日本マルクス主義文献』は、まさにその隆盛を始まりから捉えようとしている文献目録であろう。

この大正後期から始まる社会主義（無産者）運動のもとでは、精力的にマルクス主義文献の翻訳が進められ、またマルクス主義の研究とともにその一般大衆への普及も図られた。上に示したように、学術誌だけでなく、総合雑誌、またパンフレット、『講座』等、幅広い媒体にマルクス主義文献が掲載されていたことは、当時のマルクス主義文献の大衆的な広がりを示すものだろう。

以下では、『日本マルクス主義文献』に採録された文献から知られる当時の普及状況について、いくつか紹介してみたい。なお、当時の文献への立ち入った考察については本特集の大和田論文をお読みいただきたい。

採録された文献のなかで「解説」と題されたものには『マルクス資本論解説』（高島素之訳、売文社、1919年）がある。これはK. カウツキーの*Karl Marx' oekonomische Lehren*の翻訳である。福田徳三が序を寄せており、「今はマルクス流行りの世界である。河上博士がマルクス一枚看板で『社会問題研究』てふ大雑誌——量に於いてはならず質に於いてなり——を独力で刊行せらるゝ世の中である」（13頁）と当時の状況を述べ、本書について「マルクス資本論の本旨を、最も忠実に、最も簡明に、最も的確に、解説」（15頁）したものとして推薦している。

高島のこの翻訳書の売れ行きは良かったようで、売文社版の後には改訂を加えた『改訂資本論解説』（而立社（大化会版）、1924年）、さらに『改訂資本論解説』（改造社、1927年）が刊行されている。改造社版への高島による「編者序」によれば、売文社版が一万三千五百部、而立社（大化会）版が四千五百部発行された。ちなみに後者の而立社（大化会）版は「何の広告もなしに数カ月で売切れた」という。「大化会出版部がつぶれてアテネ社の手に移ったが、茲でも前後約二千部発売したとのことで、改造社版の刊行前の累計として二万部発行したと高島は記している⁽¹⁰⁾。

目録に採録されている「入門」と題した文献では『マルクス経済学入門』（石川準十郎訳、新潮社、1925年）がある。これもカウツキーの同上書の翻訳であるが、ただし、石川自身が書き加えた箇所がかなりあり、「大衆と共に理解し易く」する点に苦慮したとのことである（序文2頁）。同じタイトルでは『マルクス経済学入門』（Mary E. Marcy著、島田保太郎訳、三田書房、1919年）もある。

昨今の日本では、いわゆる格差社会を背景にしてマルクスへの注目が高まり、さまざまな入門書が刊行されたことによってマルクス・ブームとも言われるが、現代のそれに出てきそうなタイトルも採録されている。

『誰にもわかるマルクス資本論』（樋口麗陽、日本書院、1919年）

著者は冒頭で当時の状況を次のように記す。

「今日、マルクスの流行は素晴らしいもので、まるで、伝染病のように猛烈な勢いで流行して居ります。何の雑誌を見ても、どの新聞を見ても、マルクス主義とか、マルクス資本論とか、

(10) ただし、高島のこの翻訳書は本文に記した以外の出版社からも刊行されている可能性がある。

マルクス経済学説だとかの文字を見ないものではなく、労働問題の講演会などへ行って見ても、矢張りマルクスが盛んに引っぱり出されて居りまして、食傷イヤ聴傷するほど聞かされます、俗に言ふ猫も杓子もといった調子で…」

マルクスへの関心の高まりを見た著者が、それを狙って刊行したものだろうか⁽¹¹⁾。

高島が初めて全三巻を完訳した『資本論』は、難解さもさることながら、当初は高価なために庶民の手には届きにくかった。高島の大鐙閣版『資本論』第一巻第一冊（『マルクス全集』、1920年）の冒頭に寄せた福田徳三の「題言」は次のように述べている（4頁）。

当時、資本論「蘭訳」の値段は「邦貨に換算すると最上製本でも我一円二十八銭（第一巻全三冊で、僅かに三円八十四銭）にしか当たらず。恐らく資本論諸版中最廉価のものであろう」「反対に此全集第一分冊の価の高いこと、恐らく現存諸版の第一位に居るではないかと思ふ」

この資本論の第一分冊は定価六円九十銭であった。この値段の高さを福田は「現存諸版の第一位」、つまり“世界一高い”と嘆いたのである。

マルクス主義への関心が高まることは、マルクス主義文献を一般の商業ベースで流通させることも可能にしていく。改造社が火付け役となった一冊一円で販売する「円本」ブームもあり、『資本論』もまた廉価版で次のように売り出していくようになった。

改造社 高島素之訳『資本論』広告（『我等』9巻8号、1927年）

「翻訳の改訂・廉価版の発行により資本論初めて民衆に解放さる！／マルクスの資本論は有史以来人類の科学的努力が算出した最大労作のひとつである…只だ其の…難解、高価の故を以て一般に読まれざるを遺憾としたるが…本社は之を世界一の廉価版として刊行し、はじめて求め易く、読み易からしめた」「世界最廉価版の資本論 全三巻金八円」

かつて福田が“世界一高い”と嘆いた高島訳『資本論』は、その真偽はともかくも「世界一の廉価版」として刊行、宣伝されるに至った。

ちなみに改造社と岩波書店は、本特集の大村論文でみるようにマルクス・エンゲルス全集の刊行をめぐる争うのだが、『資本論』廉価版をめぐる争いでも両社はさやあてを演じている。改造社の“世界最廉価版”『資本論』は予約による販売であった。対する岩波書店版は、その「予約販売」を突く広告を次号の『我等』に載せた。

岩波書店 河上肇、宮川実訳『資本論』広告

「予約をもって民衆を緊縛せず飽くまで解放の真精神を体現する小分冊自由分売の徹底的普及版」創刊されたばかりの岩波文庫にこの『資本論』は入っており、改造社の「予約販売」に対抗したのである。

さて、『日本マルクス主義文献』に採録された文献においては、ここで取り上げた「入門」や「解説」が直接タイトルに含まれる文献は例外的である⁽¹²⁾。タイトルからみれば学術的な文献や外

(11) この著者にはさまざまな著書があるようで、『物価暴騰逆利用法』（独立出版社、1917年）、『無資産者の銀行利用法』（栄文堂書店、1919年）、『第二次世界大戦未来記』（大明堂書店、1921年）といった具合である。

国文献の翻訳が採録文献の多数とみなせるだろう⁽¹³⁾。また、当然ながら当時の思想統制下におけるマルクス主義文献の刊行であったことも留意しなければならない。とはいえこの1920年代には、マルクス主義文献が数多く刊行され、総合雑誌への掲載、また廉価版で一般向けに販売するに至るなど、マルクス主義が多くの人々の関心を引いたことは確かである。学術的な関心から大衆的な関心までをも惹きつけた、いわばマルクス・ブームの現出である。このマルクス・ブームの頂点のひとつは、本特集の大村論文が取り上げている『マルクス・エンゲルス全集』の刊行であろう。

この『日本マルクス主義文献』は14の分類項目の下にタイトルと書誌情報を採録しているだけの文字通りの目録であるが、その採録点数の多さがこの目録に独自の意義を与えている。もちろん、この種の目録に採録の完璧さ——当該期間すべてのマルクス主義文献の網羅——を求めるのは無理があろうし、当然ながらこの『日本マルクス主義文献』も完璧ではない⁽¹⁴⁾。とはいえ、他のマルクス主義文献目録とは比較にならないほどの多くのタイトルを備え、それを一覧にして示すというこの目録の意義とは、当時の研究・普及状況をより全体的に読み取る視座ないし材料を提供している点にある、といえるのではないだろうか。

つまりこの『日本マルクス主義文献』は、90年前の日本で初めて巻き起こった本格的なマルクス・ブームの様相を、700点以上にのぼる文献タイトルの採録によって捉え、示しているのである。戦前の大原社研が残した歴史資料というべき文献目録であり、関心ある方の利用を望みたい。

付記 この翻刻『日本マルクス主義文献』Web版は、2010年5月末にインターネット上で公開予定である。公開の際は大原社研のホームページにリンクを貼ってもらえる事になっているので、容易にアクセスできるだろう。

附論 聯盟版『マルクス・エンゲルス全集』について

本特集・大村論文で明らかになった改造社版と聯盟版の『マルクス・エンゲルス全集』刊行をめぐる新たな歴史的事実と、それが示唆する『マルクス・エンゲルス全集』の編集問題を念頭におきながら、ここでは未刊に終わった聯盟版の編集体制と内容構成について紹介し、若干の検討を加えたい。

1 聯盟版「内容見本」

ここで主に用いる資料は聯盟版『マルクス・エンゲルス全集』の「内容見本」である⁽¹⁵⁾。聯盟

(12) もっとも、タイトルにそうした字句がないからといって入門書や解説書ではない、というわけでは当然ない。例えば、マックス・ベア著『マルクスの生涯と学説』（西雅雄訳、三徳社、1923年）は『赤旗』1923年4月号の広告で「マルクス入門として最上の書物」として宣伝されている通りであり、内容と当時の扱われ方によって把握されなければならない。

(13) 現時点では翻訳文献はこの目録全体の4割程度にのぼると思われる。

(14) 書誌情報の調査過程では採録されていないマルクス主義文献を間々見ることがあった。この目録が何らかの選択基準をもっていた可能性があるが、この点は今後の課題としたい。

版が未刊に終わった以上、聯盟版『全集』の内容を知るためには新聞広告や「内容見本」から推測することになるが、広告では限られたスペースでの限られた情報しかないため、聯盟版の内容を知る上ではこの「内容見本」の検討がより重要であろう。

この冊子には冒頭の「刊行の辞」に「昭和三年五月 聯盟五書店」とあり、また聯盟版の広告の初出である1928年5月23日付広告（東京朝日新聞）には、「内容見本謹呈」とあるので1928年5月には作成されたものと思われる。

なお、改造社版『マルクス・エンゲルス全集』の「内容見本」は二回（「内容見本」および「改訂内容見本」⁽¹⁶⁾）出ているが、聯盟版については、新聞広告から見た限りこれのみと思われる。

聯盟版「内容見本」の主な構成は次のようである。

①冒頭「刊行の辞」、②「刊行組織」：翻訳者名等の記載、③聯盟版『全集』の構成・収録文献、④リアザノフ「マルクス・エンゲルス全集刊行に就いて」、⑤重要著作解説、⑥予告（購読者に「日本社会主義文献資料」「邦文マルクス・エンゲルス文献資料」（ともに「大原社会問題研究所編纂」）を贈呈との告知）、⑦「編集主任」五名の挨拶文

この資料から聯盟版『全集』の編集者・翻訳者を掲げ、また聯盟版が目論んだ『全集』の構成を紹介したい。

2 聯盟版『全集』の編集体制（編集・翻訳者）

聯盟版では「編集主任」5名－河上肇、櫛田民蔵、大山郁夫、森戸辰男、高野岩三郎－、その下に第一部門から第三部門の各部門ごとに配置された「翻訳委員」18名（編集主任を兼ねる者5名を含む）、その下に「担当者」（編集主任、翻訳委員を兼ねる者を含む）71名を配置している。他方で改造社版「改訂内容見本」において翻訳者として列記されたのは76名である⁽¹⁷⁾。この改造社版「改訂内容見本」と聯盟版「内容見本」において重複している者は次の12名である。

宇野弘蔵、大塚金之助、嘉治隆一、小岩井浄、小林良正、向坂逸郎、高野岩三郎、平野常治、森戸辰男、山口正吾、山村喬、笠信太郎

大村論文で紹介されている「高野からリャザーノフ宛て1928年6月25日書簡」では、大原社研が聯盟版の編集に「全責任を負う」と高野が述べているが、その大原社研の高野、森戸が改造社版の翻訳者として重複している事情については同じ書簡で高野自身が釈明している⁽¹⁸⁾。

(15) これらの資料は大村泉教授がロシア国立社会=政治史アルヒーフから入手したものを提供していただいた。記して謝意を表す。

(16) 小論で用いるのは「改訂内容見本」である。この冊子には日付はないが、1928年6月5日付広告（東京朝日新聞）に「改訂内容見本進呈」とある。この時から改造社版は『全集』に「大增補」を行い「大付録」を収録することに構成内容を変更しており、この内容見本はそれを反映している。したがって6月初めまでに作成されたものと思われる。改訂前の「内容見本」は実見できなかった。

(17) これら編集者、翻訳者については改造社による新聞広告などで諸種示されているが、ここではあくまでも改造社版「改訂内容見本」に基づいている。

(18) 「この改造社版全集には私も寄稿をします。しかも、エンゲルスのものの翻訳です。というのは、確かにこの企画には数名の、たとえば高島氏などのような、反動的な人物も関与していますが、この企画には私の多

以下に聯盟版「内容見本」に記載された翻訳者のリストを掲げる（表2、名前の後ろの*は翻訳委員、**は編集主任を表す）。改造社版は「社会思想」社のメンバーやいわゆる労農派が多い⁽¹⁹⁾のに対して、聯盟版は大原社研の所員の他に、岩田義道、市川正一、佐野学、佐野文夫、西雅雄、志賀義雄、野坂参三、野呂栄太郎その他、共産党系の理論家が参加していることがわかる。なお、表中の和田哲二は『ワイマール期ベルリンの日本人』（加藤哲郎著）などによれば国崎定洞のペンネームとのことである。また山内一郎は山之内一郎、野坂参貳は野坂参三であろう。

表2

青葉九一	久留間鮫造*	田邊忠男*	本多謙三
浅野晃*	櫛田民蔵**	対島俊次	益田豊彦
岩田義道	栗原佑	辻恒彦	松岡二十世
市川正一	黒田房雄	戸張宏	宮川実*
宇野弘蔵*	小岩井浄	中野重治	三木清*
上田茂樹	小宮義孝	内藤赳夫	水谷長三郎
越智道順	小林輝次	西雅雄	水野秀夫
岡村貞三	小林良正	西村信雄	村山藤四郎
小田忠夫	権田保之助*	野坂参貳	武藤丸楠
小椋広勝	向坂逸郎	野呂栄太郎	森戸辰男**
大山郁夫**	佐野学	長谷部文雄*	森山啓
大塚金之助*	佐野文夫	服部之総	山口正吾
大内兵衛*	志賀義雄	広島定吉	山村喬
加藤正	白谷忠三	平野義太郎	山内一郎*
嘉治隆一	杉田欣一	平野常治	矢崎美盛*
河上肇**	玉城肇	冬木圭	笠信太郎
勝木新次	高山洋吉	細川嘉六*	和田哲二
喜多野清一	高野岩三郎**	細迫兼光	

3 聯盟版『マルクス・エンゲルス全集』の構成

聯盟版は20巻構成であり、また一冊一円である。この点で改造社版「改訂内容見本」と変わりはない。聯盟版「内容見本」では、大きく三部構成として示されている。

第一分門：政治、歴史、法律、哲学、経済

第二部門：資本論、剰余価値学説史

第三部門：書簡

改造社版の構成は実際に刊行されたものから判断できるが、聯盟版については「内容見本」をみる

数の同人も関与していて、二つの全集企画が並立する前に、彼らから協力を要請されていたからです。ほかにも、私と全く同じ理由から、森戸氏も私と同様翻訳を一点寄稿することをお伝えしておきます。」

(19) この点については梅田俊英『社会運動と出版文化』、12頁参照。

ほかはない。そこで参考のために「内容見本」に記載された構成を掲げる⁽²⁰⁾。

第一部門 全9巻		経済学批判大綱	フランス及びイギリスの階級闘争
学位論文	1841年	イギリスの状態－カーライル批判	ハンゼアン内閣
アテノイムより俗謡二篇	1841年	判	フランクフルトに於けるポーランド論争
アネクドータより	1842年	パリ・フォルヴェルツより	シュレスウィッヒ・ホルシュタインのための闘争
ルーテル論		「プロシヤ王と社会改良」批判	ベルリンの反革命
最近プロシヤ検閲制度考		神聖家族	ウイーンの陥落
ライン新聞より	1842-43年	ドイツチェ・イデオロギー	ブランデンブルグ内閣
第六回ライン地方議会の討論			プロシヤ革命の結末
－出版の自由に就いて		並びにフォイエルバッハに関するテーゼ	1849年の新年
中央集権論			ハンガリー
ケルン新聞論説		イギリスの状態	民主的汎スラヴ主義
歴史法学派の哲学的宣言		イギリス労働階級の状態	ケルンの労働者に与ふ
共産主義論		独逸社会主義諸誌より	ケルン陪審官に答ふ
第六回ライン地方議会の討論		エルベルフェルト集会	1849年
－森林伐採法に就いて		ロンドン諸国民祝祭	労賃（遺稿）
自由主義的反対派		フーリエー商業論	賃労働と資本
日刊新聞に関する内閣命令		ニューヨーク・フォルクストリビューン	1849年
保護関税に就て		保護貿易か自由貿易制度か	新ライン評論より
自由思想家に対するヘルウェヒ及びルーゲの関係		スイスの内乱	1850年
アウグスブルグ一般新聞		道徳的批判と批判的道德	ドイツ帝国憲法戦
離婚法草案		ライン監察官の共産主義	イギリスの十時間法案
ライプチヒ一般新聞の禁止		哲学の貧困	ゴツーフリード・キンケル
モーゼル通信の弁明		附 プルードン観	リテラツール
地方議会代表選挙に就て		自由貿易論	レブユーエ
ライン新聞モーゼル新聞論		共産主義同盟に関する文書	ドイツ農民戦争
釈明			1850年
ドイツ年誌より	1843年	1847-50年	フランスに於ける階級闘争
「ブルノウ・バウエルとグルトツ博士の大学の自由」に就て		ドイツに於ける共産党の諸要求	1850年
ヘーゲル国法批判	1843年	共産主義原則	ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日
独仏年誌より	1844年	其他の文書	1851年
ユダヤ人問題		新ライン新聞より	革命及び反革命
ヘーゲル法律哲学批判		1848-49年	1851-52年
		独逸国民議会	イギリスに関する手紙
		カムプハウゼン内閣	1853年
		民族的諸革命	ケルン共産党事件の闡明
			1853年
			東方通信
			1853年

(20) 大村稿で紹介されている「K.Omraからリャザーノフ宛て1928年7月5日書簡」では、この聯盟版の構成、収録文献、また冒頭で記した2点の付録の件がすべて英訳され添付されている。なお、「内容見本」の構成中に掲載されたタイトルのカタカナ表記にはブレがあり、表記法が一貫しない例が散見されるため、ここで掲げたタイトルには最小限の訂正を加えている。

高貴なる意識を持てる騎士		資本論に関する評言	1867年	1845年と1855年の英国
	1853年	資本論第三巻補遺	1895-96年	法学者社会主義
支那及印度論	1853年	第一インタナショナル文書		ロシア帝室の外交政策
パーマーストーン	1853年		1864-73年	新たに発見された群婚の例
露土戦争	1853-54年	フランスの内乱	1871年	パリからベルンへ
ドナウ公領簋奪	1854年	住宅問題	1872年	カレーとバスチア
クリミヤ遠征	1854年	国際問題	1874-75年	大陸に於ける社会改良の進歩
スペイン革命	1854年	ドイツ国会に於けるプロシアの火		ホーヘンツォルレンの神法
アンハンダ（パーマーストーン評		酒	1877年	トルコからヨーロッパに何が貫
伝）	1855年	ブレンターノ対マルクス	1891年	へるか？
イギリス軍事行政	1855年	唯物史観に就いて	1893年	ドイツのプロレタリアートの政治
連立内閣の倒壊	1855年	原始キリスト教史考	1895年	的發展（1869-1874年）
パーマーストーン内閣	1855年	猿の人間化に於ける労働の寄与		「カンブ」より
汎スラブ主義	1855年		1896年	「フォルクス・シュタート」より
イギリスに於ける議会内外での批		ゴータ綱領批判	1875年	
判	1855年	反デューリング論	1878年	第二部門 全九巻
ジョン・ラッセル卿	1855年	強力と経済	1878年	資本論初版首章
イギリスの軍隊	1855年	マルクス送葬の辞	1883年	資本論
カルの陥落	1856年	家族、私有財産及国家の起源		1871-94年
十八世紀外交史の内密暴露			1884年	剰余価値学説史
	1856年	エルフルト綱領批判	1891年	1905-10年
チャーティズム	1858年	仏独の農民問題	1894年	第三部門 全二巻
経済学批判	1859年	如何にマルクスを翻訳すべからざ		マルクス・エンゲルス往復文書
経済学批判に関する評論	1859年	るか	1885年	マルクス・ラッサール往復文書
マルクス自伝手記	1860年	マルクス小伝	1895年	マルクス・フライリヒラート往復
ポーとライン	1859年	フォイエルバッハ論	1888年	文書
サボオア・ニュースとライン		弁証法と自然（遺稿）		マルクスのクーゲルマンへの手紙
	1860年	社会民主々義同盟と労働国際問題		マルクス・エンゲルス [その他-
プロシア軍事問題とドイツ労働党		「ノイエ・ツァイト」より（前出以		誤植）のゾルゲその他の手紙
	1865年	外の）	1883年	マルクス・ザスリッチ往復文書
戦争に関する覚書	1870-71年	クリミヤ戦争初期のトルコに於		エンゲルスのベッカァーへの忘れ
フォークト氏	1860年	ける諸民族		られたる手紙
アメリカの内乱	1861-62年	社会主義の歴史家としてのカー		エンゲルスのベルンシュタインへ
第一インタナショナルの創立		ル・グリューン		の手紙
	1864年	フランスに於ける反逆者とスパ		エンゲルスのシュミットへの手紙
労賃、価格及利潤	1865年	イ		エンゲルスの政治的遺言（日付宛
				名なし）

聯盟版「内容見本」および改造社版「改訂内容見本」に示された収録文献の点数は以下の通りである。

聯盟版：152点余，加えて資本論，剰余価値学説史

改造社版：278点余，加えて資本論，剰余価値学説史

ここでは両版の収録文献の比較までは立ち入る余裕はないが，例えば第一インターナショナルの諸文書に見られるように，聯盟版は「第一インターナショナル文書」として一括して記載して各々のタイトルを省いているのに対して，改造社版は各々のタイトルを記載したり，またマルクスの著作に付されたエンゲルスの序言を一項目として取り上げているなど，改造社版の方が詳細に，また多くの文献を列挙している。改造社版「改訂内容見本」は，聯盟版「内容見本」の後から作成されたとはいえ，両版ともに刊行が間近に迫った時点での内容見本としては，改造社版は各巻ごとの収録文献を明示し，かつ収録文献の翻訳担当者も明記されており，改造社版の方がはるかに準備が進展している印象を与える。

とはいえ，文献の配列を見たときにはどうだろうか。そこからその編集方針を伺い知ることができよう。聯盟版は上に掲げたように，編年史による配列を行おうとしていることが明確にわかる。全体を大きく三部門にわけたことを含め，こうした構成・編集方針はリャザーノフらによる『マルクス・エンゲルス全集』（いわゆる旧MEGA）での構成・編集方針に沿ったものといわれる⁽²¹⁾。聯盟版「内容見本」には編集方針に関する言明はないが，その代わりに，小論の冒頭で記した「リアザノフ「マルクス・エンゲルス全集刊行に就いて」」を載せている。この論説はこれまでのマルクス・エンゲルス全集の作成の試みを振り返ったあと，リャザーノフらの『全集』（旧MEGA）の編集方針－三部門に分け，編年史で配列すること－が述べられている。これは旧MEGAにリャザーノフが執筆したVorwortを翻訳して要約，ここに掲載したものであろう。こうした点を踏まえれば，やはり聯盟版はその構成において，リャザーノフらの『全集』（旧MEGA）にその範を求めようとしたものと推測できるだろう。

対する改造社版はどうだろうか。改造社版「改訂内容見本」では，やはり編集方針に関する言明は特にない。また，その構成・配列を見ると聯盟版とは異なっている。大きな点で言えば，まず聯盟版のような三部門構成を採用していない。改造社版「改訂内容見本」の構成を聯盟版と対応させれば次のようになる。

第1巻から第6巻まで＝聯盟版の第一部門

第7巻から第15巻まで（資本論と剰余価値学説史）＝聯盟版の第二部門

第16巻から第17巻まで＝聯盟版の第一部門

第18巻から第20巻まで（書簡）＝聯盟版の第三部門

また，編年史での配列という点でみれば，改造社版「改訂内容見本」の構成は独特である。「改訂内容見本」には各巻の下に「マルクス，エンゲルス，マルクス＝エンゲルス」等といった副題が添えられている。「マルクス」はマルクスの単著，「エンゲルス」はエンゲルスの単著，「マルクス＝エンゲルス」は共著を示す。例えば第1巻には「マルクス，マルクス＝エンゲルス」と巻号の下に添えられている。これは，マルクスの単著とマルクスとエンゲルスの共著を収録する巻であることを示している。配列では，まずマルクスの単著を年代順に並べ，適当なところで区切り（この区切際の基準は不明），そのあとにマルクス＝エンゲルス共著を年代順に並べている。「マルクス，エ

(21) 村田陽一がすでに指摘している。「邦訳ME全集・選集とMEGA」，極東書店『新しいMEGA』，1973年，24頁。

ンゲルス」という副題がある第2巻では、まずマルクス単著が年代順に、その後にエンゲルス単著が年代順に並ぶ。そのため、第1巻の終わりには共著である「神聖家族」1845年が配置されているが、次の第2巻冒頭ではマルクス単著の「ライン新聞」1842-43年の論文に戻る。つまり「神聖家族」の後に、「神聖家族」より以前に執筆された文献がならぶことになり、年代順には読めないことになる。この第1巻と第2巻の配列は刊行された『全集』でもほぼ同じである⁽²²⁾。「改訂内容見本」に収録されたタイトル（ただし書簡を除く）のほとんどは、刊行された『全集』のほぼ第14巻までに収録されている。そこでは「改訂内容見本」の配列がそのまま再現されているわけではなく、諸種に変化している。

こうした変化を含む改造社版の構成の詳細と概要、その理由や背景については様々な問題が絡み、興味深いものがあるが⁽²³⁾、今回は「改訂内容見本」の構成内容の検討にとどめ、刊行された『全集』の検討については他日を期すことにしたい。

（くぼ・せいじろう 東北大学大学院博士研究員）

付記 本稿は「基盤研究C 課題番号21530185」『日本社会科学の1920年代——日本資本主義論争前史の文献的研究——』の研究成果の一部である。

(22) リャザーノフはこうした改造社版『全集』を評して「改造社版がどのような原則で組み立てられているのか、全く何のイメージも湧いてこない」と述べたという。本特集・大村論文23頁。

(23) 本特集の大村論文では、聯盟版と改造社版とで行われた『全集』刊行競争の背景を踏まえながら、その「勝者」である改造社版『全集』への評価、位置づけにも言及している。本文中で触れた「配列の仕方」の問題も含めて、「世界初めてのマルクス＝エンゲルス全集」（『全集』別巻、「編集後記」576頁）との自負をもって刊行された改造社版『全集』にたいする学術的観点からの検討、またこの『全集』が果たした日本でのマルクス主義普及史上の意義と限界を考察していくことが、今後の課題である。